

ルカによる福音書20章「天からの権威と地の権威」

1A 神殿における権威 1-8

2A 神の息子としての権威 9-19

1B 僕や息子を殺す農夫たち 9-16

2B 礎になる捨て石 17-19

3A カエサルにまさる権威 20-26

4A 復活で示される権威 27-40

5A ダビデの子 41-47

1B ダビデが主と呼ぶキリスト 41-44

2B 律法学者を裁かれる方 45-47

本文

ルカによる福音書 20 章を開いてください。イエス様がエルサレムに入城されて、宮の中に入られて教えておられました。宮清めを行われた後、19 章 47-48 節にはこうあります。「47 イエスは毎日、宮で教えておられた。祭司長たち、律法学者たち、そして民のおもだった者たちは、イエスを殺そうと狙っていたが、48 何をしたらよいか分からなかった。人々がみな、イエスのことばに熱心に耳を傾けていたからである。」とあります。

なぜ殺そうとまで考えたのか？祭司長たちとはサドカイ派の人たちですが、彼らはエリートで神殿礼拝の管理をしています。ローマの支配の中で、ローマとの折り合いをつけて政治的に動いていました。大祭司であるカヤパが、ラザロをイエス様がよみがえらせた後に、このような決断を出していたのです。ヨハネ 11 章 47 節から読みます、「ヨハ 11:47-50 祭司長たちとパリサイ人たちは最高法院を召集して言った。「われわれは何をしているのか。あの者が多くのしるしを行っているというのに。あの者をこのまま放っておけば、すべての人があの者を信じるようになる。そうなると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も取り上げてしまうだろう。」しかし、彼らのうちの一人で、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った。「あなたがたは何も分かっていない。一人の人が民に代わって死んで、国民全体が減びないですむほうが、自分たちにとって得策だということを、考えてもない。」」イエス運動が起こって、ローマがユダヤ人を弾圧する理由になるだろう。あいつを殺すことで、国民全体が減びないで済むことが、我々にも得策なのだ、ということです。極めて、政治的です。もちろん、これは正反対で、彼らこそが後にローマによって滅ぼされて、神殿も滅ぼされ、サドカイ派はこの時に消滅します。

そして律法学者の多くはパリサイ派であり、パリサイ派は、安息日の論争で、イエスが彼らの解釈に違反していたので、それで怒っていましたし、主が、ご自身を父と一つにしていたので、神へ

の冒瀆を犯しているとしていました。そういったことが殺意となっています。

それぞれが、それぞれイエスを除去したい理由を持っていたことでしょう。けれども、神の目は異なっていました。神殿で宮清めをした理由を、主は預言者マラキによって語っておられました。「マラ 3:1-3 「見よ、わたしはわたしの使いを遣わす。彼は、わたしの前に道を備える。あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、彼が来る。——万軍の【主】は言われる。」だれが、この方の来られる日に耐えられよう。だれが、この方の現れるとき立っていられよう。まことに、この方は、精錬する者の火、布をさらす者の灰汁のようだ。この方は、銀を精錬する者、きよめる者として座に着き、レビの子らをきよめて、金や銀にするように、彼らを純粋にする。彼らは【主】にとって、義によるささげ物を献げる者となる。」初めの、「わたしの使い」とはバプテスマのヨハネのことです。そして、主が神殿に来るとありますが、これが主イエスご自身です。この方が精錬する者の火として、布をさらす者の灰汁のようにして、祭司たちを清めると言われています。

彼らは、イエスに問題があるとしていましたが、神の前では、彼らこそ自分たちにある汚れを主によって清められる必要があったのです。私たちも、神の宮に仕える祭司として召されていますが、自分が正しいとして何かに怒ったり、妬んだりする時に、実は主ご自身が自分の汚れや不純を取り除かれるために、そのことを行われているのだということに気づく必要があります。そこで、宮の敷地において、これら指導者たちがイエス様に挑みかかる場面を見ます。けれども、それは本末転倒であり、自分に権威があるとみなしている彼らこそが、天からの権威によって挑戦を受けて行くのが、20章の流れです。

1A 神殿における権威 1-8

1 ある日、イエスが宮で人々を教え、福音を宣べ伝えておられると、祭司長たちと律法学者たちが長老たちと一緒にやって来て、2 イエスに言った。「何の権威によって、これらのことをしているのか、あなたにその権威を授けたのはだれなのか、教えてくださいませんか。」

イエス様は、ガリラヤで福音を宣べ伝え、またみことばを教えておられたように、ここでも同じように教えておられました。私たちも、主の権能によって、恵みによって福音を伝え、みことばを教える行きますが、その時に直面するのが、地上の権威です。「あなたは、なぜそんなことをしているのか？」という、反対する圧力を受けます。ここでは、祭司長や律法学者、また長老たちが、自分たちが宮において権威であると思っていましたから、そう尋ねたのです。そしてここでは、日本語にあるような丁寧さはありません。あったとしても、裏の動機はイエス様を貶めるためです。人の権威であれば、イエス様が行っていることは無意味です。天からの権威であれば、神への冒瀆罪でイエスを訴えることができます。

3 イエスは彼らに答えられた。「わたしも一言尋ねましょう。それに答えなさい。4 ヨハネのバプテスマは、天から来たのですか、それとも人から出たのですか。」5 すると、彼らは論じ合った。「もし天からと言え、どうしてヨハネを信じなかったのかと言うだろう。6 だが、もし人からと言え、民はみな私たちを石で打ち殺すだろう。ヨハネは預言者だと確信しているのだから。」7 そこで、「どこから来たのか知りません」と答えた。8 するとイエスは彼らに言われた。「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに言いません。」

質問してきた彼らに対して、逆にイエス様が質問しています。ユダヤ人の教師はしばしば、このようにして議論を進めていきます。質問に答えるのではなく、反対に質問するのです。ここで、教師である彼らは、すでにイエス様によって教えられる立場に変えられています。どちらにまことの権威があるか、既に表れています。

バプテスマのヨハネは、先にマラキの預言で見たように、天からの権威が与えられた預言者として、民に受け入れられていました。多くの者がバプテスマを受けていました。パリサイ人やサドカイ人も来たのですが、ヨハネは彼らも悔い改めが必要であり、悔い改めにふさわしい実を結びなさいと叱責を受けていました。このことに応答しなかったのです。神の家を建てる者たちが、どのように神の前にへりくだり、悔い改めるかが分かっていなかったのです。そして、イエス様は飽くまでも、バプテスマのヨハネの宣教の延長としてご自身の宣教を行っておられました。同じメッセージであり、「悔い改めなさい、神の国は近づいたから。」と言われて始められました。ですから、ヨハネとイエス様の宣教は一對だったのです。ヨハネが天から来たことを認めれば、イエス様も天から来たことが自ずと悟ることができます。

ところが、彼らはヨハネを受け入れなかった理由は不問にして、神からか、人からかということ、答えませんでした。民が自分たちに怒り、石打ちで殺すのではないかと恐れたからです。ヨハネを人からといったら、自分たちが偽教師であると断罪されてしまいます。神からの人であることは、あまりにも明らかだったからです。それでイエス様は、「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに言いません。」と言われました。彼らの権威というものが、民にどれだけ支持されているかにかかっていたのです。であれば、そんな権威は軽いですね。神からの権威というのは、あたかもサウルの息子ヨナタンが、道具持ちとたった二人で大勢のペリシテ人に立ち向かうように、その力は人にあらず、神にあることを証明しているのです。人の意見や人の力に頼って権威や力が保たれるのであれば、それは偽物です。神によってまことの権威と力が来ます。

2A 神の息子としての権威 9-19

1B 僕や息子を殺す農夫たち 9-16

そしてイエス様は、間髪を入れずに次の譬えを語られます。

9 また、イエスは人々に対してこのようなたとえを話し始められた。「ある人がぶどう園を造り、それを農夫たちに貸して、長い旅に出た。

主人が僕たちに自分のものを任せて、遠くの旅をするという枠組みは、今回が初めてではないですね。ミナの譬えがそうでした、主人が十人のしもべたちに、それぞれ一ミナを渡して、それで商売をしなさいと言って、王位を受け取るために遠い国に行ったという譬えをイエス様は語られました。このようにして、主のものを任されて、主が来られるまでの間、そこをどのように管理するのか？ということ、神は私たちに問われているのだと思います。

ここでの譬えは、これを聞いていた祭司長たちや律法学者たち、長老たちはすぐに、思い浮かぶ話でした。ぶどうは、イスラエルの象徴であり、神殿の建物にも彫刻されていました。そしてイザヤ書5章には、はっきりとそのぶどう園がイスラエルであることを、主が言われています。5章において、主なる神ご自身がぶどう園の所有者で、ぶどう園はイスラエルです。そこに肥しを入れ、丁寧に育てたのに酸いぶどうができてしまった、とあります。それは主が、この民を選ばれたのが正義を行なうためだったのに、流血が出てしまった。正義や平和、善意などの良い実ではなく、流血、不正、虐げ、偶像礼拝などの悪い実ができてしまった、ということです。

ですから、イエス様の譬えでも、収穫というのは、正義や平和、善意などの実を結ぶことを意味しているのでしょう。そしてここでの農夫は、指導者たちのことです。大事なものは、この農夫らは、小作農だということです。農作はしますが、あくまでも主人の畑を耕しているものであり、その四分の一以上は主人がもらっていくということです。ところが、そこで小作農が問題を起こして、自分自身ののだとして反抗する者たちもいたのだそうです。そういった問題のある小作農のために、主人は兵を雇っていたということもあったそうです。

10 収穫の時になったので、彼は農夫たちのところに一人のしもべを遣わした。ぶどう園の収穫の一部を納めさせるためであった。ところが農夫たちは、そのしもべを打ちたたき、何も持たせないで帰らせた。11 そこで別のしもべを遣わしたが、彼らはそのしもべも打ちたたき、辱めたうえで、何も持たせないで帰らせた。12 彼はさらに三人目のしもべを遣わしたが、彼らはこのしもべにも傷を負わせて追い出した。

なんと、三度に渡って、遣わされたしもべたちを何も持たさないで帰らせました。、聖書では三回によって、それが確かに変わらぬ事実であると認められる場合があります。三日目に主が甦られたのは、確かに三日間、墓の中に葬られて、死んだという事実が確認されている、というようなものです。イスラエルの歴史の中で、何度となく、主が預言者を遣わして、ふさわしい悔い改めの実を結ぶように説いていたのに、それでも言うことを聞かず、むしろ預言者たちを迫害してきました。そして、その急先鋒が、指導者だったのです。王たちもそうですが、なんと祭司たちや、預言者た

ちが、真の預言者を迫害していました。

13 ぶどう園の主人は言った。『どうしようか。そうだ、私の愛する息子を送ろう。この子なら、きっと敬ってくれるだろう。』14 ところが、農夫たちはその息子を見ると、互いに議論して『あれは跡取りだ。あれを殺してしまおう。そうすれば、相続財産は自分たちのものになる』と言った。15 そして、彼をぶどう園の外に放り出して、殺してしまった。こうなったら、ぶどう園の主人は彼らをどうするでしょうか。

ここで主ははっきりと、ご自身とこれまでの預言者とを区別しておられます。預言者は神のしもべでありましたが、ご自身は神ご自身の子、御子であられます。イスラム教では、イエスは他の預言者と同じ預言者として同列に並べますが、新約聖書はそれを否定しています。

そして指導者たちの動機を見てください。「相続財産は自分たちのものになる」というものです。小作農の身分のものが、所有者になろうとしているのです。指導者は神の家を管理する者であり、その所有者ではありません。しかし、管理をしている中で自分たちのものとするのが、当然の権利だとみなしていったのです。これがキリスト者にも陥りかねない大きな過ちです。

16 主人はやって来て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるでしょう。」これを聞いた人たちは、「そんなことが起こってはなりません」と言った。

農夫たちが殺されるのは、紀元 70 年です。神殿がローマによって破壊されます。そして、イスラエルの国民ではない人々、すなわち異邦人たちに渡します。もちろん、主を受け入れたユダヤ人の弟子たちは追い出されることはありませんが、イスラエルは国民としてメシアを受け入れる機会を逸しました。それで、世界中に今、イスラエルのキリストであるイエスを異邦人たちが受け入れるようになっています。そして人々は、「そんなことが起こってはなりません」と叫んでいます。これは、どうしてでしょうか？農夫が、主人の息子を殺してしまうなんて！という衝撃です。しかしイエス様はこれが現実だと言われるのです。

2B 礎になる捨て石 17-19

17 イエスは彼らを見つめて言われた。「では、『家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった』と書いてあるのは、どういうことなのか。

これは、過越の祭りで歌われるハレル詩篇の一部です。ハレル詩篇は、113-118 篇ですが、イエス様が引用されたのは、118 篇 22 節です。メシアがエルサレムに入られる時の預言です。イエス様がエルサレムに入城される時に、人々は 26 節を引用して神を賛美したのですが、つまり、これはメシアが通らなければいけないこと、神がすでに定めていたことなのだ、ということです。キリ

ストは苦しみを受けなければならず、その苦しみは、神の家を建てる者たちに捨てられることによってなのだ、ということです。

しかし、神はそれを礎の石にされます。キリストをよみがえらせることによってです。この方は生ける石となり、教会はその要の石をもって、霊の神の家として建てられます。この方にしか、その死によってのみしか、人々を救うことはできないように神がされたのです。ここに神からの権威があります。イエス様は教会のことを、「マタ 16:18 よみの門もそれに打ち勝つことはできません。」と言われました。ですから、キリストはご自分の権威を、教会の苦しみを通して現します。

18 だれでもこの石の上に落ちれば、粉々に砕かれ、またこの石が人の上に落ちれば、その人を押しつぶします。」

人々が、十字架で死なれ、甦られたキリストに対してどう応答するのかで、裁きが決まります。初めの、「だれでもこの石の上に落ちれば、粉々に砕かれ」というのは、自分自身でその石につまずいて、倒れることを意味しています。「イザ 8:14-15・しかし、イスラエルの二つの家にとっては妨げの石、つまずきの岩となり、エルサレムの住民には罨となり、落とし穴となる。多くの者がそれにつまずき、倒れて打ち砕かれ、罨にかかって捕らえられる。」そして、「この石が人の上に落ちれば、その人を押しつぶします」というのは、キリストが天から再臨されて、その時に裁かれることを意味します。「ダニ 2:35 そのとき、鉄も粘土も青銅も銀も金も、みなともに砕け、夏の脱穀場の籾殻のようになり、風がそれを運んで跡形もなくなりました。そして、その像を打った石は大きな山となって全土をおおいました。」

19 律法学者たちと祭司長たちは、このたとえ話が自分たちを指して語られたことに気づいた。それでそのとき、イエスに手をかけて捕らえようとしたが、民を恐れた。

再び、この地上にいる権威者たちは、民を恐れる恐れによって、イエス様にある天からの権威に逆らうことができませんでした。そこで次には、地上における主権者、すなわちローマの権威に頼ろうとするのです。

3A カエサルにまさる権威 20-26

20 さて、機会を狙っていた彼らは、義人を装った回し者を遣わした。イエスのことばじりをとらえて、総督の支配と権威に引き渡すためであった。21 彼らはイエスにこう質問した。「先生。私たちは、あなたがお話しになること、お教えになることが正しく、またあなたが人を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられることを知っています。22 ところで、私たちがカエサルに税金を納めることは、律法にかなっているでしょうか、いないでしょうか。」

とても言葉巧みに、イエス様に質問しています。主が、真っ直ぐにお語りになり、真理に基づいて神の道を教えておられるとへつらいながら、誘導尋問をしています。当時のユダヤ人は、ローマの圧政に苦しめられています。ユダヤ人には反乱を起こしたいと思う者たちが散発的に現われており、例えば、ピラトがガリラヤ出身のユダヤ人たちの血を、ガリラヤ人たちの献げるいけにえに混ぜたという見せしめを行ないました(13:1)。そして、税金というのは彼らにとって異邦人に屈服する象徴であり、それで酷く嫌っていました。前回、ザアカイについて学びましたが、取税人がどうして嫌われていたのか、その大きな理由はその屈辱的な行為をユダヤ人なのに、自ら買って出て、しかも私腹を肥やすためにやっていたからです。

ここでもし、律法にかなっているとさえ、民衆を興醒めさせ、その人気は怒りに変わることでしょう。そして熱心党の者たちが、もしかしたらイエス様の命を狙うかもしれません。なので、それはやらないと判断していました。ここで、律法にかなっていないと言ってもらおうとしていたのです。そうすることによって、ローマ総督の支配と権威に引き渡すことができます。このように、政治というのは、世の常のことですが、こちらを立てると、あちらが立たず、という代物です。一人の政治的主張は、もう一人の政治的主張を否定することになり、それで争いが起こりますね。なので、こういったジレンマに陥れるのは、容易です。しかも、民主主義国ではなく、ここはローマ帝政です。イメージとしては、日本のような国ではなく、中国のような一党独裁で、数多くの民族を統合している大国のほうが似通っています。ですから、政治的意見の表明が、命取りになる危険があります。

23 イエスは彼らの悪巧みを見抜いて言われた。24 「デナリ銀貨をわたしに見せなさい。だれの肖像と銘がありますか。」彼らは、「カエサルのです」と言った。25 すると、イエスは彼らに言われた。「では、カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」26 彼らは、民の前でイエスのことばじりをとらえることができず、答えに驚嘆して黙ってしまった。

イエス様は、極めて単純に、だれでもわかるような論理で、人間にとっては難解な問題に解答を与えられました。どちらを立てても、争いが起こるような状況の中に平和という実を結ばせるのが、神の知恵の特徴です。単にその場を取り繕うのではなく、両者が納得するような言葉を持っています。「ヤコ 3:17 上からの知恵は、まず第一に清いものです。それから、平和で、優しく、協調性があり、あわれみと良い実に満ち、偏見がなく、偽善もありません。」

デナリ銀貨ですが、当時の一日の労賃に相当する金額です。イエス様たちは神殿の境内にいますから、そこでは両替してシケルに換金していますから、持ち合わせておられなかったのでしょうか。他の礼拝者も持っていなかった人が多かったかもしれません。そこには、ローマ皇帝であるカイサルの肖像と銘が刻まれています。「ティベリウス・カエサル・アウグストゥス 神のアウグストゥスの息子」とあります。ローマ帝国の皇帝崇拝を如実に表していますね。神の子としてあがめられていましたから、まさにまことの神の子キリストのパロディです。しかし、この神殿から出れば、どのユ

ダヤ人もこの銀貨を使用しており、自分たちはローマの支配下にあり、かつローマによって日常生活や経済活動を行っていることを、認めざるをえないのです。

イエス様はここでパリサイ派の矛盾を暴かれています。彼らは、ローマ皇帝は人間の王であり、メシアではないから、彼を王として認めていませんでした。なので、反体制派です。そして納税することも、ローマに権威があると認めていることになるとしていました。しかし彼らとて、当然、ローマの恩恵を受けています。その支払う税金によって、ローマは道路を作り、他の制度やインフラを作っています。そして彼らも生きるためにその銀貨を、経済活動のために使用しているのです。二重の基準、ダブルスタンダードを持っているのです。イエス様は、そういったところで自分たちが神に仕えて、神とメシアのみを王としているといきり立っていることに、「何をいきり立っているのか？」と暗に問いかけておられるのです。そんなところに拘っても、神の国のために全くなっていないと言われているのです。「カエサルのはカエサルに」返しなさい、と言われます。つまり、「世にある権威には、感謝し、敬意を持ちつつ、義務を果たしなさい」と言われているのです。ローマ 13 章には、「人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神に立てられているからです。(1 節)」とあります。

そうではなく、「神のものは神に返しなさい」と言われます。神の国は、この世のものではない、いやこの世を超えたところにある大義です。イエス様は総督ピラトに言われました、「ヨハ 19:36 わたしの国はこの世のものではありません。もしこの世のものであったら、わたしのしもべたちが、わたしをユダヤ人に引き渡さないように戦ったことでしょう。しかし、事実、わたしの国はこの世のものではありません。」そこに命をかけるべきであり、命をかけていないから、人間のレベルで世の権威に逆らっているだけなのに、神に従っているつもりになっていることを言っておられます。そもそも、カエサルの肖像と銘がその銀貨にあったように、聖書には神の肖像があります。それは、イエス・キリストご自身です。「ヘブ 1:3 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。」

神の国は、世にある権威に、それが主から来たものとして従いながらも、なおのこと主にお仕えして、この方がまことの王であることを、へりくだりと敬いの中から証しするところに現れます。そうやって、ローマ帝国の中のキリスト者は拡がって行きました。ローマへの反体制運動を行わなかったのも、上に立てられている権威を敬っていたので、ローマは弾圧しようにも、どうすればよいか分からなかったのです。おまけに、疫病が流行った時に自ら感染する危険を冒しながら、人々を助けました。皇帝を主として告白しなかったのも、彼らを罰し、殺していききましたが、それでも彼らはローマに敵愾心を抱いたわけではないし、反抗しなかったのも、殺そうにも根拠が薄くなっていったのです。そうやって、キリスト者は増えて行き、ついに皇帝自身がキリスト教を名乗るほどになったのです。

4A 復活で示される権威 27-40

これは、全くの革命に近い考え方だったに違いありません。「彼らは、民の前でイエスのことばじりをとらえることができず、答えに驚嘆して黙ってしまった。」とあります。そこで、次にパリサイ派ではなく、サドカイ派の人たちがイエス様に近づきます。彼らは、イエスの権威と一緒に逆らったのですが、次からの質問は、パリサイ派の人たちをこき下ろすもので、云わばイエスに敵対する力は既に分裂してきたのです。

27 復活があることを否定しているサドカイ人たちが何人か、イエスのところに来て質問した。28 「先生、モーセは私たちのためにこう書いています。『もし、ある人の兄が妻を迎えて死に、子がいなかった場合、その弟が兄嫁を妻にして、兄のために子孫を起こさなければならない。』29 ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎え、子がいないままで死にました。30 次男も、31 三男もその兄嫁を妻とし、七人とも同じように、子を残さずに死にました。32 最後に、その妻も死にました。33 では復活の際、彼女は彼らのうちのだれの妻になるのでしょうか。七人とも彼女を妻にしたのですが。」

当時のユダヤ教の中には、律法に厳密になろうとするパリサイ派の他に、神殿礼拝を管轄していたサドカイ派がいました。彼らは裕福な貴族階級におり、今もエルサレムでの旧市街には、ハリウッドのビバリーヒルズもびっくりするかもしれない、豪邸の遺跡が残っています。彼らは、当時、一番権威を持っていました。パリサイ派は一般の民に支持されていましたが、彼らはローマから認知されていた人々です。なので、律法に書かれていること以上に神殿で礼拝を捧げることが守られることを願っていました。世俗で多神教のローマとも現実的に対処して、政治的に動こうとしたグループです。彼らは聖書に対して合理主義でした。復活のような奇跡、御使いなどの目に見えないことは信じない合理主義者、物質主義者だったのです。彼らの信じているのは、モーセ五書、創世記から申命記までです。

ここで仮定としてあげていることは、申命記に出てくる律法です。「25:5-6 兄弟と一緒に住んでいて、そのうちの一人が死に、彼に息子がいない場合、死んだ者の妻は家族以外のほかの男に嫁いではならない。その夫の兄弟がその女のところに入り、これを妻とし、夫の兄弟としての義務を果たさなければならない。そして彼女が産む最初の男子が、死んだ兄弟の名を継ぎ、その名がイスラエルから消し去られないようにしなければならない。」子孫を残すために、弟がその義務を負わなければなりません。実は、律法が成立するまえから慣習として存在していました。ユダの子のオナンは、長男エリが死んだので、妻のタマルと結婚しなければなくなりました。けれども、オナンはそれを嫌がって、精子を地に流したので、主の怒りを買って、殺されました。そして、モーセによってそれが律法として神が定められたのです。ですから、サドカイ派の人は復活を信じたら、一人の女に七人の男が夫になることになるが、それは律法であってはならないことだと言って、その非合理性を突いたのです。

34 イエスは彼らに言われた。「この世の子らは、めとったり嫁いだりするが、35 次の世に入るのにふさわしく、死んだ者の中から復活するのにふさわしいと認められた人たちは、めとることも嫁ぐこともありません。36 彼らが死ぬことは、もうあり得ないからです。彼らは御使いのようであり、復活の子として神の子なのです。

先のパリサイ派の反体制的考えは、世の権威との対立に陥っていましたが、サドカイ派は、目に見えるもの、この地上の物質の世界である力しか信じていませんでした。死から甦るという力は、この物質にある力学を超えているのです。めとったり嫁いだりする必要はない、御使いのような存在であり、神の子だと言われます。私は以前、ある知人の結婚式に出席しました、多くの未信者の方々が挨拶する時に、「末永くお幸せに」という言い回しを使っていたのですが、私は、「結婚はあつという間です。」とわざと逆のことを言いました。それは離婚するという意味ではなく、死が別つまで一つに結ばれているのですが、地上での生活は後の世に比べたら僅かなのだということを伝えたかったのです。結婚は、キリストと教会を表す制度として神が地上に置いてくださったものであり、後の世においては存在しないものです。

ここでの「神の子」というのは、私たちが霊的に今、神を父とする関係を持っているということと言っているだけでなく、事実、自分が復活して、体も贖われ、栄光の姿に変えられていることを意味しています。目に見えない世界は、目に見える世界を打ち破り、勝利する力を持っているからこそ、死者からの甦りがあるのです。

37 モーセも柴の箇所、主を『アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神』と呼んで、死んだ者がよみがえることを明らかにしました。38 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です。神にとっては、すべての者が生きているのです。」39 律法学者たちの何人かが、「先生、立派なお答えです」と答えた。40 彼らはそれ以上、何もあえて質問しようとはしなかった。

彼らはモーセ五書を信じていたので、イエス様はモーセ五書から復活を論証されたのです。モーセに柴の火の中で主が現れたのは、出エジプト記であります。モーセの時は、もうすでにアブラハム、イサク、ヤコブは、数百年も前に死んでいました。主は、「わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神であった」と言わずに、今も彼らの神であるとしてモーセに現れました。つまり、アブラハム、イサク、ヤコブは、モーセが生きていた数百年後においても、なおのこと生きていたということです。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神ですから、この三人の族長はモーセの時代も生きている、ということでもあります。したがって、死後に生きるという希望があるのです。そして死後に、体をもって甦るという希望があるのです。ルカ 13 章 28 節には、神の国でアブラハム、イサク、ヤコブが復活していて、そこで彼らと共に食事することをイエス様は語られています。

イエス様は、死に対して勝利する力と権威を持っておられます。イエス様ご自身が死んだのに、

甦られました。そして、使徒ヨハネに対してこう言われました、「黙 1:17-18 恐れることはない。わたしは初めであり、終わりであり、生きている者である。わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。また、死とよみの鍵を持っている。」

復活を信じている律法学者たちは、この答えに納得してしまいました。「彼らはそれ以上、何もあえて質問しようとはしなかった」と言っています。「あなたの権威はどこから来ているのか？」と挑戦していた彼らは、なんと今は、自分の教師であるかのようにイエス様に聞いているのです。これが、神からの権威と地上の、人間の権威の違いです。

5A ダビデの子 41-47

そこでイエス様は、彼らの教えている権威が実は権威がないことを問い詰められます。

1B ダビデが主と呼ぶキリスト 41-44

41 すると、イエスが彼らに言われた。「どうして人々は、キリストをダビデの子だと言うのですか。
42 ダビデ自身が詩篇の中で、こう言っています。『主は、私の主に言われた。「あなたは、わたしの右の座に着いていなさい。43 わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。』」44 ですから、ダビデがキリストを主と呼んでいるのです。それなら、どうしてキリストがダビデの子なのでしょう。」

これは詩篇 110 篇にある、メシアを預言する詩篇です。初めの「主」というのは神ご自身ですが、ダビデが「私の主」と言っているのは、メシア、キリストのことです。サムエル記第二には、ダビデに対して彼から出る世継ぎの子が永遠の国を受け継ぐことを、神は約束されていました。それは、ダビデの息子ソロモンのこと以上に、後に来る子孫に、神の国の王となるキリストが出て来るということでした。イザヤ 9 章に、男の子が生まれて、その子が御国を治める預言があり、ダビデの後世に、その子が出て来るということです。

パリサイ派の人たちは、キリストをダビデの子として、彼が人として来ると理解していました。けれども、よく考えれば、なぜダビデが生きている時に、キリストを主と呼んでいるのか？が不思議です。もしキリストが単なる人間であれば、ダビデが生きている時代にキリストは存在していなかったはずですが、しかも、「主」と呼んでいます。族長の社会と文化を背負っている彼らが、自分から出てくる子を主と呼ぶことなど、到底あり得ない事です。イエス様は、この矛盾を語られたのです。

ここでイエス様は、「キリストは永遠の昔から生きておられる、神の御子」ということを語られようとしています。イザヤ 9 章においても、「9:6 ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。」とありますが、後者「男の子」は「御子」とも訳せます。神の御子なのです。だから続けて、「9:7 その名は『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。」とあり、父なる神と同一の方として預言しているのです。そしてこの方は、処女から生まれ

で「インマヌエル」と呼ばれるとも7章にあり、神は共におられるという意味で、つまり神ご自身であることを指し示しているのです。当時のユダヤ人は、キリストが神の子としての名称は知っていましたが、そこまで深く考えていなかったのです、永遠に生きる神の子であり、神ご自身であるということにまで、発想が言っていませんでした。

ですから、イエス様に対して彼らは挑みかかったのですが、実は神ご自身に対して挑みかかったのです。イエス様は、神から来られた方であり、神からの権威があるだけでなく、ご自身が御子として神ご自身であるのです。

2B 律法学者を裁かれる方 45-47

ですから、イエス様は、彼らに裁かれるのではなく、裁く方なのです。神の家を治めなければいけない者たちなのに、先ほどの農夫のようにわが物にしていたのです。そのことを、具体的にイエス様は次に取り上げられます。

45 また、人々がみな耳を傾けているときに、イエスは弟子たちに言われた。46 「律法学者たちには用心しなさい。彼らは長い衣を着て歩き回ることが好きで、広場であいさつされることや会堂の上席、宴会の上座を好みます。47 また、やもめの家を食い尽くし、見栄を張って長く祈ります。こういう人たちは、より厳しい罰を受けるのです。」

一つに、人に見えるようにして、自分を正しいとしていたこと。次に困っている人々に対して、その弱さを利用して私腹を肥やしていたことです。偽善と強欲のかたまりなのだ、ということです。

こうやって、主の権威が彼らの権利に対して勝利しました。私たちが、どの権威を身にまとうているか？が問われます。主は私たちと共におられます。けれども、私たちが主に従っていなければ、主の権威の下にいないければ、容易に、自分自身が権威だと思ってしまうのです。そうすれば、高慢は破滅に先立つという箴言の言葉通り、倒れてしまいます。謙遜のあるところに、真実な栄誉が伴います。